かけっ放し二度右衛門

大館地方に比較的多くみられる話に力持ち伝説がある。ある話は史実に基づくものであったり、一部には、語り継がれているうちに話しが付け加えられたりしたものがあろうが、現在では歴史的事実としてより、語り話として話し手に意識されて語り継がれているようである。力持ちの話は、山仕事をする人や領境警備の下士、山拠人などの間に多かったようで、ほかに素戔嗚尊を祀る八坂神社のある片山地区にも多く、こちらは多分に史実性を含んだ話である。

長木地区の雪沢の小左衛門という山拠人のせがれ小一郎は、一二歳で五尺一寸もあって、領内巡回の役人への

馳走として若勢相撲を見せたおり、一七歳以下の者には負けなかったという。

片山の下総家の先祖に三十郎という剛力ものがいて、草相撲の大関として長い間活躍していた。徳川三代将軍家光の頃、明石志賀之助という身長二・五尺もの力士がいて、あまりに強かったことから力自慢を鼻にかけ人々に嫌われるようになった。佐竹侯は三十郎を江戸に呼び寄せ志賀之助と御前相撲を行なわせることにした。三十郎は志賀之助のからだに驚いたが高慢ぶりに覚悟を決め立ち合うことになった。しかし、いざ相撲となるとからだが大きいのに何ともしかたなく、三十郎は志賀之助の頭上高く持ち上げられ、ほおり投げられそうになった。その瞬間、三十郎は志賀之助の両肩に足をかけ、チョンマゲの元結をつかんで自分のからだをいっぱいにそらした。志賀之助は土俵に投げつけようと力を入れるが、力を入れるほど三十郎は体重の全部をかけてくるので、とうとうがまんできなくなって仰向きに倒れてしまった。これまでにない珍しい技なので検査役から物言いがついたが、三十郎は「皆は日本の相撲の手を知らないが、これは『鷹の喰い落し』という手だ」と将軍に申し上げ、三十郎の勝と決まり、金三〇〇両と蜀江の錦というしめこみを贈られ、「きょうから相撲のしこ名を『かけっ放し二度右衛門』と名乗るように」とほめられ、面目をほどこしたという。

三十郎については後日談があり、また子孫にも二・三の力持ちの話が伝わる。

以後、三十郎は「かけっ放し二度右衛門」と呼ばれたが、片山に帰って農作をしていると、ある日怪人が現われて相撲を所望した。もみ合っているうちに相手はフッと消え、締め込みから爪が六本落ちた。この怪人は津軽の岩木山の鬼で、爪をまつった森が石戸氏の畑にあるという。

三十郎の子孫に太田四郎兵衛という者がいて、その娘が大力で有名で、大館の城を築くとき人夫に出て、田町から一尺五寸角、長さ二間の材木を運び、一息で穴門の坂を登ったという。

そのまた末の天保のころに生まれた万吉は、江戸相撲藤島の門に入り荒鷹万吉を名乗った。これは事実のようで明治二年三月の江戸相撲番付表に、西三段目九枚目に荒高万吉がみえる。その後、片山に帰って草相撲で活躍、阿仁滝田の羽立山岩松と東西の大関を張った。ある時、根下戸で奥羽連合一行と対戦し秋田勢が惨敗した中で、荒鷹・羽立山は一行の大関都川・嶽の岩を一蹴したという。荒鷹の先祖に怪力女がいたように、羽立山の姉も大力であったといい、羽立山には相撲話によくある、大関を倒して毒殺されかかったという話もある。